

# Memories

— 記憶の旅人たち —



氷見（ひみ）



## 独白-monologue-

---

怖い。

いつだって、いろんな事に怯えている。

毎晩見る夢のこと。

そして、それ以外の記憶がないこと。

夢の中で、私はいつも戦っている。

言い表すことができない、とてつもなく大きい敵。

それと対峙する私の頭に響く、少女の声。

そして、私の身体を駆け巡る、たくさんの感情。

押し潰されそうなプレッシャーに負けそうなところで、いつも目が覚める。

そしてまた、自分の記憶が戻っていないことに気づき、涙を流す。

怖い。

いつだって、あいつの陰で怯えている。

偉大な兄貴のこと。

そして、平凡な俺自身のこと。

あいつはいつだって、俺の自慢の兄貴だった。

昔から優しく、それでいて強くて、頼りがいのある男。

この世界のあらゆる遺跡をめぐり、ジエンディア大陸の歴史を解き明かした男。

そして、俺の耳に聞こえてくる、たくさんの言葉。

偉大な兄貴がいるプレッシャーに負けないように頑張っているけど、いつも空回り。

そしてまた、自分の力のなさを実感して、涙を流す。

— 『記憶』が、いつも自分を苛むんだ。

## 1.

---

「おはようございます！ノンさん！」

「エステルさん、おはようございます。今日も良い天気ですね！」

小高い山に囲まれたこの村は、今日も平和に包まれている。

「ノンさん！」

「あ、アイリンさん、おはようございます！」

「おはようございます～。ウェルおじさんが呼んでいましたよ。新しいハーブティーができたんですって！」

「えっ！すぐに行きます！」

朝を告げる小鳥達のさえずりと、高地ながら寒さを感じさせない暖かい陽光。そして、自分を迎えてくれる、数々の声。

ノンと呼ばれた少女は、この村の朝が大好きだった。自然の、人々の温かさが、夜毎見る「悪夢」から目覚めた自分を優しく包んでくれる。

——悪夢。

それはいつも同じ光景。

眠りに落ちると必ず見る、とてもおぞましい光景。

「……っ」

慌てて、ノンは首を横に振る。網膜に焼き付いてしまった映像を、必死で振り切る。

「行こ。おじさんのとこ」

ノンは溜息混じりに呟くと、駆け足でレストランに向かった。

ジェンディア大陸北西に位置する小さな村、ベロス。辺境の山林の中にひっそりと存在するこの村は、雄大な自然に囲まれている。付近にある清涼な湖は貴重な水源として、群生する野草は万能の薬草として、人間や動物の生命の糧となっている。

ノンもまた、この村に住む少女である。肩まで伸びた薄氷色の髪にはアオイチの名物「桜」をあしらった髪飾り。ルビー色の大きな瞳。純白の肌は空色のワンピースに包まれ、どこか儂げな印象を受けるが、持ち前の明るさが、それを少し和らげている。

「ウェルおじさん！おはようございます！」

「おや、ノンさん。お早うございます」

ウェルと呼ばれた初老の男性は、ノンの姿を見ると、目を細めて微笑んだ。

「新しいハーブティーができたんですって？」

「ええ、ちょうど山林を抜けた先にある休憩所の辺りに、良いハーブが生えていたんですよ。是非、ノンさんにも味わっていただきたいくて」

ウェルは立派な白ひげを揺らしながら、楽しそうにケトルに火をかけ、湯を沸かしている。ノンは人生の先輩でありながら、いまだに子供のような笑顔を見せるウェルを誰より慕っていた。

そんなウェルは、湯が沸くとすぐにケトルを持ち上げ、ハーブの入ったティーポットに高々と湯を注ぐ。ガラスのティーポットには綺麗なエメラルド色のハーブが何層にも重なっており、湯を

注がれるとまるでくるくると踊るようにポットの中を揺らめいた。

「少し高いところから注いで、空気を含ませるのが、美味しくなる秘訣です」

ウェルは落ち着いた声で、しかし嬉しそうにハーブのダンスを眺めている。ノンも同じように、ポットの中のパーティを楽しんでいた。

ほどなくして、ポットは次第に綺麗な翠色へと変容していく。それをカップに注ぐと、辺り一面に爽やかな香りが広がった。

「どうぞ。新作のブレンドハーブティーです」

「...いただきます」

しばしその美しい輝きに見とれ、それからカップを手取る。鼻先をくすぐる爽やかな香りに目を細めてうっとりする。薄紅色の唇にカップを当て、一口。

「...ほっ」

思わず溜息が出る。口いっぱい広がる芳醇なハーブの旨味が、ノンの全身に幸福を運ぶ。

「美味しい...」

そうしてハーブの香りの残る口から出た言葉は、とても簡潔で、純粋な気持ち。

「そうですか、それは何より」

ウェルは満面の笑みで頷いた。

「このハーブ、ウェルさんが摘んできた場所に、まだありますか？」

「ええ、今年は気候も良いですから、良質のハーブがまだまだたくさんありますよ」

ウェルの言葉を聞くや否や、ノンの目がぱっと輝いた。

「じゃあ私、早速取ってこようかな！私もこのハーブ淹れてみたい！」

「しかしここ数日、モンスターたちが活発化しています。一人で摘みに行くのは危険です」

「大丈夫ですよ。私、走るの早いほうだから！」

「左様ですか...しかし無茶をしてはいけませんよ」

「えへへ、ありがとうございます」

ノンはウェルの心配が照れくさくなり、少し頬を赤らめながら再びハーブティーに口をつけた。

「確かこの辺りのはずだけどなあ」

ノンはウェルに教えてもらったハーブの場所に向かって、緑の生い茂る山林を歩いていた。着いたワンピースはそのままに、黒のレギンス、スニーカーを履いて、鼻歌を鳴らしながら軽快にステップ。一見するとピクニックにでも行くような雰囲気だが、ベロス周辺の山林は生息するモンスター達が大人しく、旅人に向けて襲い掛かってくるような獰猛な存在は多くない。それを見越しての軽装だった。

「ぷいっ、ぷいっ」

それを象徴するかのよう、まんまるな身体に二つの丸耳、ふわふわの丸い尻尾をたくわえたモンスター・プリリンが二匹、山林で仲睦まじくじゃれあっているのがノンの視界に入った。よくよく耳を澄ますと、木々に止まった紫色の甲虫・ビートルたちが小気味良い羽音を鳴らして、小さな演奏会を開いている。ノンはその光景に心と足を弾ませながら、演奏会に交じるように鼻歌

を鳴らす。

「あ」

そうしてしばらく山林を進むと、ノンの眼前には青々としたハーブが視界いっぱい広がった。

「ここだ！」

そこはベロス周辺の山林を抜けた先にあった。野原に、太陽の光をいっばいに浴びて輝くハーブが、そよ風に揺れて心地良い香りを辺り一面に振りまいている。

「これならいいお茶が淹れられそう…」

ノンはうっとりとした表情を隠せず、小走りにハーブへと向かう。爽やかな香りに包まれながら、ノンはハーブティーに使うものを選別し始めた。

「あれ？」

ふと視線の先に違和感を覚え、ノンの手が止まる。少し離れた場所を見ると、違和感の正体ははっきりと見て取れた。

「あの辺り、少し荒らされてる」

その場所へ向かうと、ノンの言葉通りハーブの群れの一部が荒らされているのが判別できた。あるものは踏み潰され、またあるものは鋭い爪で千切られた痕が見え、異質な雰囲気醸していた。

「何かの暴れたあと？」

ノンの背筋に悪寒が走る。至る所に残った傷痕は、明らかに自然に付けられたものではないからだ。つまりそこで、何者かが暴れ、そして植物たちを傷つけていったことが鮮明に表れている。

ノンは恐ろしくなり、辺りを何度も見回した。まるでその恐怖に呼応するかのよう、周りのハーブたちがガサガサと激しい揺れを起こす。

「！」

緊張で身体が震える。揺れの正体はまだ分からない。見えない存在に怯え、ノンは完全に自分を見失っていた。

（逃げなくちゃ）

本能がそう叫ぶ。それが全身の神経に行き渡るまで数秒。ノンがもと来た道を振り返り走ろうとした瞬間、

「グル…」

視線の先にその存在はいた。ガサガサに荒れた茶色の毛、血走った目、むき出しになった牙。『ウルフ』と呼ばれるそれは、この山林のふもとに生息するモンスターである。常に集団で行動し、冷静かつ素早い身のこなしで獲物を捕らえる。しかし本来は山林の奥でひっそりと暮らしており、こうして人の踏み入る地にはあまり立ち入らない。

「ウルルルル」

そんな習性さえ忘れてしまったかのように、ウルフはノンの周りを取り囲む。一匹、また一匹と、次第にノンを囲む数は増えていき、最初の一匹に恐怖しているうちに、その数は十を越えていた。

「あ、あ」

ノンの喉の奥からは、小刻みに震える声しか出ない。そんなノンを弄ぶかのように、ウルフ達はノンを囲んでぐるぐると回り、様子を伺っている。

（逃げなくちゃ、逃げなくちゃ、逃げなくちゃ）

生存本能が警鐘を鳴らす。恐怖がそれと混ざり合い、頭の中を駆け巡る。何かに弾かれたように、ノンは走り始めた。方向など分からない。しかし今は、少しでも安全な場所へ。

その行動に、ウルフ達が一步引いた。慎重な彼らは、相手が動き出した瞬間、まずはその行動を捉えようと回避行動を取る。一瞬の隙を突き、ノンはウルフ達の輪から逃げ出した。

「はっ、はっ！」

破裂しそうな心臓。止まりそうな呼吸。恐怖と本能に振り回されながら、ノンはただ当てもなく走った。

「ワウ！ワウ！」

その後をウルフ達が追う。対象を見失わないよう、連携してノンを再び取り囲むべく軽快に足を動かす。

「はあっ、はあっ！」

——大丈夫ですよ。私、走るの早いほうだから！

ウェルに向けて言った強がりなど、野生のモンスターの前では無力。あっと言う間にスピードは落ち、次第に足が鉛のように重くなる。

「ふう、はあ…」

程なくして、ノンの足が止まった。そこには自然に囲まれた森の中では異質な石柱が高くそびえており、そしてノンはそれに寄りかかった。

「……」

ウルフ達は息も切らさず、ノンとの距離を詰める。疲労と恐怖で、ノンの顔がゆがむ。無意識にその瞳から涙が溢れる。「死」という不可避の現実が自らを襲い、頭の中が真っ白になる。

「助けて…誰か！」

叫ぼうとして出た声は、擦れて小さく震えるだけ。どうしようもない恐怖に耐え切れず、その唇を強く結んだ瞬間、

「ワグッ！！」

ウルフの一匹が、突然何かに驚いたように後ろに跳んだ。

「え？」

ノンがその方を見る。そこには一本の木の矢が地面に突き刺さっていた。その刺さり方は、ノンの後方から矢が放たれた事を表していた。

「去れ！ウルフ！」

少し若い声が響く。ノンがその声の方を振り返ると、そこには弓を引き絞り攻撃の態勢に入っている、一人の青年の姿。

「その女から離れる！」

少し跳ね上がった黒いショートカット。草木の色に溶け込んだミリタリースーツに身を包んだ三白眼の男は、戦慄するモンスター達に向けて叫んだ。

「グル…」

ウルフ達がしばらく唸り声を上げ、男と睨み合う。しかしその男の鋭い眼光と引き絞られた弓に、彼らは次第に戦意を失い、ノンの周りから離れていった。

「...は」

ウルフ達が完全に視界から消えた時、ノンの口からそんな小さな言葉が漏れた。そして糸の切れた操り人形のように、ノンはその場にへたり込んだ。

「大丈夫か？」

男は警戒を解くと、そのままノンの元へ駆け寄る。

「あ...」

喋ろうとするが、上手く言葉にならない。恐怖からの解放が、ノンの全身と思考を弛緩させ、そのままノンは意識を失い倒れた。

「あ、おい」

男はそんなノンの上半身を抱える。その華奢な身体は男の腕の中にすっぽりと収まり、ノンのか弱さを腕に伝える。

「まったく、しょうがないな」

男は誰にともなくごちる。

「.....」

そして、ノンが寄りかかっていた石柱を見上げる。しばらくそうしていたが、

「このままにはしておけないか」

男はノンを抱えあげると、そのままもと来た道に戻り始めた。

## 悪夢 - Nightmare -

---

「これで最後よ！『凶暴なる魔王』ビースト！！」

私の耳に、勇ましい女性の声が聞こえる。

また、あの夢だ。

「ククク...ハハハハハ！」

そして、この不快な高笑いも、良く覚えている。

「愚かな...『デル族』の娘よ。この身体を構成するものは『憤怒』。そしてこの存在が意味するものは『絶望』。それがどういう意味か...お前の身を持って教えてやろう！！」

その声の主は、とてつもなく大きく、おぞましい敵。そして、そんな存在に対峙する自分。だけど、その身体は自分のものではなく、呼ばれる名前も他人のもの。

そして、この夢の結末は、いつも決まっている。

「！」

そのおぞましい存在が手のような何かを私の目の前にかざすと、胸の奥からたくさんの感情が溢れ出してくる。

情熱、信頼、慈愛、...そして失意、憤怒、絶望。

様々な感情が私の全身を駆け巡り、涙が溢れ、そして—

## 2.

---

「！」

まるで何かに弾かれたように、ノンの身体が起き上がる。

「ん？やっと目が覚めたか」

ノンははっとなってその声の方を見た。果たしてそこには、先程自分を助けてくれたミリタリースーツの男が一本の木に寄りかかって座っていた。

「ここは...？」

「あんたが倒れた所の近くにある休憩所だよ。物好きな旅人が、同胞のために用意した場所さ」

「倒れた...そっか、私」

ノンはまだ少しぼやけた頭を振り、意識を鮮明にする。そして、慌てて男に声を掛ける。

「あ、あの。先程はありがとうございました。おかげで助かりました」

「大したことはない。ただ、そんな軽装であの森を歩くのは、あんまり勧められないな」

「ご、ごめんなさい」

ノンはばつが悪そうに俯いた。

「無事だったんだからいいさ。それよりあんた、どこから来たんだ。この周辺は危ないし、送るよ」

「いや、そんな迷惑をかける訳には」

「好意は素直に受け取るもんだぜ。またさっきみたいになりたいのか？」

「う...」

ノンは言葉を失った。確かに、またさっきのウルフ達に狙われるとも限らない。あんな恐怖は、もう味わいたくない。

「じゃあ...お言葉に甘えます。私、ベロスから来ました」

「ベロス？それは丁度良いな」

「え？」

「俺も行くところだったんだ。ベロスに」

男は表情一つ変えず口にする。

「ベロスに...ですか？」

ノンは素直な疑問の声を上げた。ベロスは山林に囲まれた辺境の村であり、訪れるものはそう多くない。そんな場所に何の用があるのか。

「ああ。探し物があってね。さて、そうと決まったらすぐ出発だ。立てるか？」

「あ、はい」

ノンは慌てて立ち上がる。良く見ると、下には男が用意したと思しき青い寝袋が敷いてあり、彼の気遣いが見て取れた。

「あの、ありがとうございました、寝袋」

「ん」

男はそれを淡々と丸めると、慣れた手つきで出立の準備を整える。

「あの」

「なんだ？」

「随分手馴れていますけど...旅の方ですか？」

「ああ、そう言えば自己紹介もしてなかったな」

男はあっという間に支度を終え、立ち上がると口を開いた。

「俺はカイト。『レンジャー』をやってる」

「レンジャー？」

ノンがその言葉を反芻した。

「遺跡調査やトレジャーハンティングを生業としているんだ。もっとも、俺はまだ駆け出しだけど」

カイトと名乗った青年は少し不満そうに口に出す。その言葉を裏付けるように、良く見ると表情は少し幼さが残り、おそらくノンと近い年齢、少なくともノンにはそう見えた。

「何だ」

「えっ！？い、いえ、何も」

どうやらじっと顔を見てしまったらしい。カイトはその三白眼をノンに向けた。

「まあいい。ついでに寄りたい所がある。日が落ちないうちに行くぞ」

男は視線をベロスの方角に向けると、そのままノンを気遣う風もなく歩き出した。

「あっ、ちょっと待ってくださいよ！！」

慌ててノンも、その背中を追った。

「え、えっと、寄りたい所ってどこなんですか？」

「すぐに分かる。この近くだ」

カイトは早足で山林を突き進む。ノンはそれに付いて行くのがやっとで、小走りになりながら必死で後を追う。

「あれ？ここって」

程なくして、ノンが気づく。視線の先には、ウルフ達に襲われた時に見た、巨大な石柱。

「もともとこいつの調査も目的の一つだった。いきなりウルフに襲われている女がいたんで驚いたがな」

「うう...」

ノンは申し訳なさそうに俯く。そんな様子など気にも留めずに、カイトは石塔の調査を開始する。

「これ、何なんですか？自然に出来たものじゃなさそうですね」

「そうだろうな。材質も形状も、この周辺の環境で自然に出来るものとは考えられない」

カイトはノンの方を見ずに返事をした。

「これはある旅人達が、行く先々で残していったものだと言われている」

カイトは背中の中のバッグを下ろして、紙の束を取り出した。

「ジエンディアの各所で確認されているものとまったく同じだ」

「文字とか書いていないんですか？」

「記号のようなものは書かれているが、何を意味しているか不明だ。...一体何のために造られたのか」

ノンも不思議だといった表情で、石塔に触れる。

「！」

その瞬間。

ノンの目がぱっと開いた。

——私とムーウェンは、ここで初めてのモンスターに出会いました。

——それから、少しお茶目な三人の旅人にも。

——私達がこれから向かう「エリアス」は、とても賑やかな所だと聞きました。

——これから私達は、どんな人達に出会っていくのかな。

ノンの頭の中に響く少女の声。それはノンにとって、とても聞きなれた声だった。

「うそ...！今の声は！」

「どうした？」

カイトがノンの方を見やる。ノンは驚愕の表情で立ち尽くしていた。

「『イリス』の声...！」

「イリスだって!？」

今度はカイトが驚愕の表情をする番だった。カイトは持っていた紙の束を地面に投げると、そのままノンの肩を掴んだ。

「イリスの声が聞こえたのか!？ここから!？」

「や、ちょっと!痛っ」

「何が聞こえた?何て言ってたんだ、イリスは!」

「やめてくださいッ!」

ノンの必死の懇願に、カイトの手が緩む。

「あ、ああ、すまない」

「どうしたんですか、突然」

「いや、何でも」

慌てて冷静さを取り繕うが、顔から流れる冷や汗が、明らかにカイトの動揺を表していた。

「何でもないわけじゃないですか」

「.....」

「教えてくれないと、さっきのイリスの言葉、教えてあげませんよ」

ノンは少し膨れて言う。しばらく沈黙が続いたが、カイトはふう、と溜息をつく、

「俺はその『イリス』の調査をしている」

諦めたようにつぶやいた。

「イリスの？」

「ああ」

「イリスって一体誰なんですか?この石塔を造ったのも、イリスなんですか?」

「いっぺんにいろいろ聞くなよ。イリス...『イリス・イヴィエール』。滅びたと言われていた『デル族』の最後の末裔と言われている」

「デル族？」

ノンが反芻する。その名前にも聞き覚えがあった。夢の中で、何度も言われた言葉。

「お前も知っているだろう。この世界に『魔王』と呼ばれる凶悪な存在がいた頃の話だ。ジエンディア大陸のどこかに『デル族』と呼ばれる少数民族がいた。一説によれば、彼らは神秘的な力を持っており、周囲の人々からその力を崇められ、敬われていたと言われている。その力と信仰を恐れた魔王は、邪悪な蛇の一族『アガシュラ』を使って、デル族を襲い、滅ぼした」

「えっ...」

ノンが絶句する。魔王とか、神秘の力とか、滅ぼすとか...聞きなれない単語の羅列に、ノンの思考は混乱するばかりだった。

「だが、辛うじて生き残った者が一人いる。それがイリスだ。彼女は成長した後、たくさんの仲間達と旅をし、至る所にこの石塔を造ったと言われている。そして冒険を続けた後...謎の失踪を遂げた。半年前の話だ」

「半年前！？」

半年前という単語に、ノンの身体がびくと跳ねた。

「イリスは何故失踪したのか？この石塔の意味は何か？それを調査するのが、今の俺の仕事だ」

「そうだったんですか...」

ノンはこれまで知らなかった情報の応酬に困惑を隠せない。

「...なんで、あなたはイリスの調査を？」

そんな中、唯一の疑問がノンの頭をもたげた。これまでの話を聞いた限りでは、イリスとカイトに直接の接点はない。

「実績が必要だからだ」

「実績？」

「俺達レンジャーは名を上げるために実績を必要とする。駆け出しの俺にはまだ誇れる実績も経験もない。デル族の末裔の謎を解けば、俺だって兄貴みたいに...」

と言い掛けて、カイトははっと気づき、右手を口に当てた。

「？」

「な、何でもない。とにかく俺は何としてもイリスを調査しなくちゃいけないんだ」

「はあ」

ノンが間の抜けた声を上げる。

「それより、さっきお前が聞いた声は、本当にイリスのものだったのか？何と言っていたんだ」  
熱くなった自分を取り繕うように、早口でカイトが問うた。

「え、ええ、多分イリスの声です。旅の記録のようなものでした」

ノンはカイトに、頭に聞こえたイリスの言葉を伝えた。

「ムーウェン...『ナ・ムーウェン』か。イリスと共に旅をした仲間の一人だ」

ノンの言葉を聞いたカイトが、誰にともなく呟く。

「そして、エリアスへ向かう記録...やはりイリスは、ベロスから旅立ったということになるな」

「...そっか。だからあなたはベロスに」

「そうだ。当たりは付けていたんだが、これで確実に」

カイトは高揚した気持ちを抑えることが出来ず、身体をうずうずさせている。

(最初はクールなイメージだったけど、案外そうでもないのかな)

ころころと表情を変えるカイトに、ノンは少し親近感を覚えた。

「しかし、何でお前にはイリスの声が聞こえたんだ？」

「えっ？」

「俺もこの石塔を半年前から調査しているが、イリスの声なんて聞こえたことはなかった。お前は一体何者なんだ？イリスに縁があるのか？」

「い、いえ！」

ノンは慌てて首と手を左右に振った。

「私も何でか分からないです...でも、とても聞きなれた声。嫌になっちゃうくらいに...」

「ん？」

ノンの物憂げな表情。カイトはその表情を見逃さなかった。

「どうした？」

「...何でもないです」

ノンは笑顔を取り繕って、カイトに微笑みかけた。しかしその表情はあまりに哀しげで、儂い。カイトにはそう見えた。

「さ、ベロスに戻りましょう。また狼さん達に追いかけるのは嫌ですからね」

「あ、おい、待て！」

休憩所と反対に、今度はノンがカイトに背を向けて歩き出した。カイトは頭に疑問符を浮かべながら、散らかした資料を慌てて片付け、ノンの後を追った。道中、二人は一言も言葉を交わさなかった。

### 3.

---

「あらノンさん、お帰りなさいませ」

「ただいま、エステルさん」

斜陽が辺りを照らし、世界というキャンバスに紅を振りまく頃、二人はペロスの村に辿り着いた。二人を迎えたのは、村で道具屋を営むエステル。彼女は店の前で、大きなダンボールを抱え、せわしなく働いていた。

「あら、そちらの方は？」

「えっと、山林で出会ったレンジャーのカイトさんです」

「あらあら、お客様なんてめずらしいですね。何も無いところですが、ゆっくりしてって下さいね」

エステルはウェーブの掛かったブロンドのツーテールを揺らし、向日葵のような笑顔を見せた。

「それで、カイトさん。ペロスには何を？」

「ここにもイリスが立てた碑石があるはずだ。それを調査する」

「碑石？そんなのありましたっけ？」

ノンが左手の人差し指を頬にあて、首を傾げる。

「あら、それでしたら中央広場にありますよ。時計台のすぐ脇に」

「あ、あのお魚の噴水があるところですね」

ペロス中央広場には、三日月をかたどった振り子が揺らめく時計台があり、その周りを噴水が取り囲んでいる。噴水の中には魚のオブジェが時計台を守るように置いてあり、その口から水が噴射される仕組みになっている。そんな広場の脇に、その碑石は存在する。

ノンとカイトはエステルと別れ、中央広場に向かった。果たしてそこには、中心に蒼いプラズマを纏った、やはり異質な雰囲気醸し出す碑石が佇んでいた。

「こいつか。この形状はジエンディアの各都市に点在する碑石と一致する」

「山林で見たものとは、形が違うようですけど」

カイトはそれには応えず、調査を開始した。おそらく問いの答えは分からないのだろう、ノンもそれ以上は問わなかった。

「この碑石から、イリスの声は聞こえるのか？」

「えっ...」

ノンがびっくりしたようにカイトを見る。

「山林同様、ここにもイリスの記憶が残っているかもしれない。調査する価値はあるだろう」

「なんで、私が」

ノンは明らかに狼狽し、カイトに問うた。

「俺では出来ないからだ。理由は分からないが、あんたにはイリスの声を聞くことが出来るんだろ？」

カイトはそんな様子など気にも留めず、淡々と返す。

「.....」

ノンは無意識にカイトを睨んだ。自分を調査の道具のように扱われたことに腹が立ったこともそ

うだし、何より自分から進んであの少女の声を聞くことが、たまらなく嫌だった。

「.....」

カイトもそれに対抗して睨む。何としてもイリスの声を聞く。梃子でも動かない信念が、瞳の奥から覗いていた。

「おや、ノンちゃん。どうしたんだい？」

その時、二人の間を割って入るように声がした。二人してその方を見ると、そこには恰幅のいい中年男性が立っていた。

「ロハンさん！」

「喧嘩しているようにも見えたが...何かあったのかな？」

ロハンと呼ばれた男は、大きく丸い鼻をさすって問うた。

「い、いえ、何でもありません」

高揚した気持ちを抑えるように、ノンは慌てて俯く。夕日に照らされ、その顔は一層赤くなっているように見えた。

「そちらの方は？見慣れない人だね」

「えっと...」

「レンジャーのカイトと言います。訳あって、この碑石の調査をしています」

「ほう、碑石をね」

ロハンはその言葉を聞くと、少し寂しそうな表情を浮かべた。

「どうしたんですか？ロハンさん」

「いや、ちょっと昔話をね、思い出していた」

ロハンは碑石に向かい、そして右手を付く。

「これはイリスが、旅立ちの時に立てていったものさ。『いつか必要になる時が来る』って言ってね」

「イリス？彼女の事を何か知っているんですか？」

カイトははっとして、ロハンに質問を投げた。

「そりゃもう。私もここに住んで長い。今でも良く覚えているよ。まだあどけなさの残る少女が、同じく幼い少年...ムーウェンを連れて旅に出た日のことをね。たった一人残ったデル族の末裔として、魔王を討伐しに旅立ったあの可哀想な少女の事は、忘れようもない」

ロハンは慈愛の表情で、その碑石を見つめている。

「彼女は今どこへ？」

カイトはそんな哀愁を振り払うかのように、続けて問うた。

「さあねえ。ただ、イリスが失踪したと言われた半年前、ムーウェンだけが失意の表情で戻ってきたことがあった」

ロハンはその時の様子を語り始めた。

「彼にイリスの行方を問うてみたが、まったく答えてくれなくてね。そのまま、やらなくちゃいけない事があると言って、すぐに旅立ってしまったんだ。確かここから南方にある大神殿『プルトン』の更に奥...『赤龍の巢』と言われる洞窟だったな」

「赤龍の巢...そこに行けばムーウェンに会えるんですか？」

「おそらくはな。だがあの洞窟には恐ろしい龍が棲んでいると聞く。危険だぞ」

「大丈夫です」

カイトは碑石の調査もそこそこに、リュックを背負いなおすと、

「貴重な情報ありがとうございました。私はこれで」

そのまま村の出口に引き返して行こうとした。

「おいおい、待ちたまえ。そろそろ日も暮れる、今から出歩くのは危険だ。せめて今夜はこの村に泊まって、また明日にきなさい」

「でも」

「何を焦っているのかは知らないが、急いで事は仕損じるよ。年上の言うことは聞くもんだ」

「...分かりました」

カイトは不満げな表情を隠せず、しかし少し焦りすぎた自分を諭すように、そう返した。

「いろいろ世話になったな」

ロハンと別れた頃、日は完全に落ち、夜の帳が降りていた。カイトとノンは中央広場で対面し、言葉を交わしている。

「いえ」

ノンはまだ不満げな表情を隠していない。

「さっきから何を怒っているんだ」

「何でもないです」

何でもないと言いながら、ノンの頬は膨らみ、明らかに怒っている表情そのものである。

「...そうか。それならいい。じゃあ、これで」

カイトはその表情の奥を探ろうとはしなかった。そのままノンに背を向け、宿への道を歩き始めた。

「最後に一つ。いいですか」

背を向けたカイトに向けられた言葉。カイトは振り返って応える。

「なんだ？」

「さっきからイリスの事になると、見境がなくなってるようにも見えるんですけど。どうしてそんなに焦っているんですか？」

「いきなり何を」

「答えて下さい」

カイトの言葉を遮る様に、ノンが言葉をかぶせる。そのあまりの剣幕にしばらくカイトは黙っていたが、

「...く」

観念したように溜息ひとつ。

「俺には、兄貴がいるんだ」

カイトはぼつりと呟き始める。

「『ルーインウォーカー』...遺跡探検家の兄貴は、とても優秀な奴でな。今の俺くらいの年のこ

ろから、仲間達と共にたくさんの遺跡を見つけ、その筋では知らない者がいないくらい有名になってしまった男。そんな偉大な兄貴を持つとな、いつも俺は比較の対象にされる。かたや偉大な探検家、かたや平凡な駆け出しのレンジャー。故郷アオイチで聞こえる声はいつも兄貴への賞賛と、俺への失望の声さ」

カイトは肩をすくめた。

「だから俺は、兄貴に負けない偉大な探検家になる。それを知らしめるために、イリスの謎を解き明かす必要があるんだ。そのためには、寝る時間だって惜しい」

カイトはぎゅっと拳を握る。その腕は少しだけ震えていた。

「...羨ましいですね」

「羨ましいものか！あんたには分からないだろうな。常に兄貴と比較される、そして失望される俺の気持ちなんか」

「分かんないですよ！！」

ノンは今まで以上に大きな声で叫んだ。

「だって私、比較されるような家族だって、思い出せるような記憶だってないんですから！」

「えっ」

その言葉を聞いて、カイトから啞然とした声が漏れた。

——笑わないで聞いてください。

私、半年前より昔の記憶、全然ないんです。

気づいたらベロスの村に倒れてて、名前以外の記憶を一切失ってた。村のみんながそんな私を気遣って、住むところや食べ物まで支援してくれて。本当に優しくしてくれた。

でも自分は誰なのか、何処から来たのか、そんな不安でいつも心が押しつぶされそうになるんです。

それから私、毎日夢を見るんです。すごく恐ろしい敵と戦う夢。夢の中で私は「イリス」って呼ばれてて、必死になってその敵を倒すの。でも最後はいつも、その敵に何か恐ろしい術をかけられて...気持ちが壊れるくらいの絶望に襲われるんです。毎日毎日、そんな夢を見て目が覚めて。どうしようもないくらい、哀しくなるんです。

ノンの独白を聞いたカイトは、絶句して立ち尽くしていた。

「だから私は、どんな記憶だって欲しい。良い事も嫌な事も、どんな事でも良いの。空っぽの"None"（ノン）のままは、嫌なんです」

「...そう、だったのか」

カイトは返事をするだけで精一杯だった。自分とはまったく違う境遇に置かれた少女を、ただ見つめる事しか出来なかった。

「その...ごめ」

「モンスターだーッ！！」

カイトが何かを言いかけた瞬間、村の入り口の方から叫び声が聞こえた。

「な、なに！？」

ノンが入り口の方を見やる。そこには月明かりに照らされて、不気味に光る巨大なモンスターの姿が見えた。

「あれはゴブリン！？しかもかなりでかい！」

カイトが驚愕の表情を浮かべる。月夜に浮かぶその顔は、全身緑の異形のモンスター・ゴブリンだった。しかも、通常のそれよりはかなり大きく、表情も狂気に包まれている。

「こっちに向かっている！？」

カイトの言葉どおり、ゴブリンは他の村人には目もくれず、こちらに向かって一心に突進して来ていた。すぐさま、ゴブリンは二人の前に立ちはだかる。

（オ前ガイリスノ記憶ヲ持つ者か）

ゴブリンはノンに狂気の瞳を向けた。

（魔王様ノ命令ダ。デル族ト、ソノ記憶ヲ持つ者ハ抹殺スル！）

言うが早いか、ゴブリンは右手に持ったトゲ付きの鉄球を振り上げ、ノンに向けて振り下ろさんとする。

「危ない！」

カイトはノンを抱えると、その場から跳躍して離れた。ノンのもと居た場所に、鉄球が叩きつけられ、レンガの地面が勢い良く弾ける。

「きゃあっ！」

それは石の礫となり、二人を襲う。カイトはノンを庇うように抱き寄せる。礫の一つが、カイトの背中を強く打ち付けた。

「ぐッ！」

カイトに苦悶の表情が浮かぶ。それは抱き寄せられたノンにはっきりと見えた。

「あんたは逃げろ。奴が狙っているのはどうやらあんたらしいからな」

「でも！」

「いいから逃げろ！」

カイトの怒号。ノンはびくと身体をすくませた。

「お前、記憶がないんだろ？このまま逃げて、生き続ければ、きっと、そのうち、記憶が戻る、ことも」

礫を背中に打ち付けられて、呼吸が上手く出来ない。カイトは息をするのも苦しそうに、それでも言葉を続ける。

「大丈夫、お前の事は、絶対に護る」

それから少しだけ笑顔になって、

「...ごめんな。怒鳴ったりして」

その言葉は、それまで肩肘を張って焦っていた男から出た、とても素直で優しい言葉だった。

「い...嫌だよ...」

それを聞いたノンの瞳に涙が浮かぶ。

「このまま私だけ逃げろなんて...そしたら、村の皆も...あなたも！」

もう、何も失いたくない。

記憶を失くしてから出会った人達も。今日の前で、自分を護ると言ってくれた人も。

「もう何も失くしたくなんかないよお！！」

ノンの願い。心からの叫び。

——あなたに勇気を——

その言葉に呼応するかのよう、あの声が聞こえる。

——私が『仲間』からもらった勇気を、あなたにも——

「！」

ノンの身体が熱くなる。その瞳に輝きが灯る。カイトはノンの異変に気づき、その身体を離れた。

(何ダ！？)

ゴブリンが驚愕の表情を浮かべる。白いオーラを身体に浮かべたノンは、じっとゴブリンを見据えて構えている。

「はっ！」

ノンは両の手を前にかざす。刹那、その掌からいくつもの水玉が生み出され、ゴブリンの周囲を取り巻き、

(ギャッ！？)

まるでシャボン玉のように弾け、水の礫をゴブリンに浴びせた。

「バブルバブル...水魔法か！」

「今です！」

ノンがカイトに向けて叫ぶ。カイトは頷くと、背負っていた弓矢を構え、勢い良く引き絞った。

「兄貴から教えてもらったこの技で！」

カイトは引き絞る手に魔力を加える。瞬間、矢の回りにプラズマが起こり、ばちばちと音を立て始めた。

「『サンダーグリフィン』！」

カイトの叫びと共に、その矢が放たれる。矢は勢い良くゴブリンの額めがけて飛び、それが触れた瞬間、

(ギャアアアアッ！！)

まるで落雷を起こしたかのように、爆ぜた。ゴブリンの全身に衝撃が走り、魔物は断末魔の悲鳴を上げて、地に伏した。

「はぁ、はぁ」

一回の使用でも、相当に体力を使う。カイトは肩で息をしながら、ゴブリンの倒れ行く様をじっと見つめていた。

「無事か？」

ゴブリンの絶命を確認すると、ノンの方を振り向く。

「はい...」

ノンからは既に白いオーラは消えていた。

「イリスの声がしました。私に勇気をくれる、って」

「そうか。あんたの願いに、イリスが応えてくれたんだらうな」

カイトはノンの言葉に頷くと、

「...無事で良かった」

とても素直で、優しい笑顔を見せた。

「本当に行くのかい？」

明朝、中央広場。ノンとカイトの周りを、ベロスの村人達が囲んでいた。ロハンが心配そうな顔で、ノンに問うた。

「ええ。今回の事で気付いたんです。イリスは私に何か伝えたいことがあるんじゃないかって。私がモンスターから狙われた理由も、私の記憶喪失の原因も、イリスを探すうちに分かるかもしれないから」

「そうか。もしイリスに会うことが出来たら、伝えて欲しい。ベロスの皆が心配していたと」

「はい、必ず」

「気を付けて、行ってらっしゃいませ」

エステル心配そうな声に、ノンは笑顔で応えた。

「ありがとうございます、エステルさん」

「もし辛い時は、いつでもベロスに戻って来て下さい」

ウエルの優しい声。ノンは大きく頷いて応えた。

「はい、また美味しいハーブティーを淹れてくださいね」

村人達の応援は尽きない。カイトは苦笑を浮かべて、

「もうそろそろいいか？」

溜息混じりにノンに聞いた。

「あ、ごめんなさい」

ノンは少し照れながら苦笑した。そして、

「あ、そうだ。碑石に込められたイリスのメッセージ、聞いていきます」

ノンは碑石に向かって歩いた。そして、手をかざし、碑石に触れる。瞬間、ノンの脳内にあの声が再び響いた。

——今、世界に危機が訪れようとしています。

——あなたの力が必要なんです。

——私の記憶を辿り...必ず、私を見つけてください。

イリスの懇願。悲痛な声。

「大丈夫だよ、イリス」

ノンは頭に響く言葉に、優しく応える。

「私が必ず、あなたを見つけるから」

そしてノンは、空を仰いだ。

「あの夢は、あなたのメッセージだったんだね。ずっと気づかなくて、ごめんね」

昨夜はあの夢を見なかった。記憶を失ってから毎日続いた絶望の夢は、旅の決意をしたその日に、ノンの恐怖と共に消え去った。

「お待たせ。それじゃ行こうか、カイト君」

「ああ。これからよろしくな、ノン」

昨日会ったばかりの二人は、はじめてお互いの名前を呼び、ペロスの村を後にした。

記憶を失くした少女と、記憶に縛られた青年。まるで正反対の二人の旅は、これから始まるのであった。